

A 年降誕後第 2 主日 マタイ 2 章 13 | 15 | 19 | 23 節

〔直訳〕

13 だが去って 彼らが

見よ 主の天使が 現われる 夢で ヨセフに  
言いながら、

「立って 連れて行きなさい 子どもとその母を

そして 逃げなさい エジプトへ

そして 居なさい そこに まで 私が語る あなたに。

**なぜなら** まさにしようとしている ヘロデが 探すことを 子どもを 殺すために 彼を」。

14 だが彼は立って 連れて行った 子どもとその母を 夜に

そして 彼は去った エジプトへ、

15 そして 彼は居た そこに、 ヘロデの最期まで。

ように 満たされる 言われたことが 主によって 預言者を通して  
すなわち

「エジプトから 私は呼んだ 私の息子を」。

19 だが最期を迎えて ヘロデが

見よ 主の天使が 現われる 夢で ヨセフに エジプトで

20 言いながら、

「立って 連れて行きなさい 子どもとその母を

そして 行きなさい イスラエルの地へ。

**なぜなら** 死んでいる 探す者たちは 子どもを魂を」。

21 だが彼は立って 連れて行った 子どもとその母を

そして 彼は入った イスラエルの地へ。

22 だが聞いて 次のことを、

アルケラオが 治めている ユダヤを 彼の父ヘロデに代わって

彼は恐れた そこへ 出かけることを。

だがお告げが与えられて 夢で

彼は去った ガリラヤの地方へ、

23 そして 来て、

彼は住んだ 町に ナザレと言われる。

ように 満たされる 言われたことが 預言者たちを通して  
次のことが

「ナザレ人と 彼は呼ばれるだろう」。

〔新共同訳〕

13 占星術の学者たちが帰って行くと、主の天使が夢でヨセフに現れて言った。「起きて、子供とその母親を連れて、エジプトに逃げ、わたしが告げるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデ

が、この子を探し出して殺そうとしている。」14 ヨセフは起きて、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトへ去り、15 ヘロデが死ぬまでそこにいた。それは、「わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した」と、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

19 ヘロデが死ぬと、主の天使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて、20 言った。「起きて、子供とその母親を連れ、イスラエルの地に行きなさい。この子の命をねらっていた者どもは、死んでしまった。」21 そこで、ヨセフは起きて、幼子とその母を連れて、イスラエルの地へ帰って来た。22 しかし、アルケラオが父ヘロデの跡を継いでユダヤを支配していると聞き、そこに行くことを恐れた。ところが、夢でお告げがあったので、ガリラヤ地方に引きこもり、23 ナザレという町に行って住んだ。「彼はナザレの人と呼ばれる」と、預言者たちを通して言われていたことが実現するためであった。

### ①構成

①a マタイ2章13―23節には三つのエピソードが述べられている。ここで注目すべきことは、第一のエピソード（13―15節）と第三のエピソード（19―23節）が次のような同じ構成を持っていることである。

- a 見よ、主の天使が夢でヨセフに現れる（13節と19節）
- b 立つて子ども（イエス）とその母を連れて行きなさい（13節と20節）
- c それで彼（ヨセフ）は立つて子どもとその母を連れて行った（14節と21節）
- d 預言者を通して言われていたことが満たされるように（15節と23節）

どちらのエピソードでも、主の指示（b）を受けたヨセフは忠実にその指示に従っている（c）。このように同じ構成を繰り返すことによって、ヨセフが従順に神に従ったことが強調されている。①bしかしこの二つのエピソードに挟まれた第二のエピソード（16―18節）では、占星術の学者にだまされたヘロデ王の行動が描かれている。彼は「ユダヤ人の王」が生まれた（12）という知らせに恐れを抱き、ベツレヘム周辺の二才以下の男子を皆殺しにする。自分の地位に固執するヘロデは、神から離れてゆく。

①c以上をまとめると、マタイ2章13―23節の構成は次の通りである。

- |                  |        |
|------------------|--------|
| 第一のエピソード（13―15節） | ヨセフの従順 |
| 第二のエピソード（16―18節） | ヘロデの反抗 |
| 第三のエピソード（19―23節） | ヨセフの従順 |

ヨセフもヘロデも、イエスが誰なのか、知り尽くしてはいないだろうが、平凡な人ではないことは知っている。しかし両者がイエスに取った態度はまったく対照的である。一方は抹殺しようとし、他方は神の指示に従順に従う。これは生まれてきたイエスが平凡な人ではないと知った人々の葛藤の物語だとも言える。

### ②第一段落と第二段落の対応

① 第一段落は三つの部分から成り立っている。まず13節では、主の天使が夢の中でヨセフに現れ、「立って、連れて行きなさい……エジプトへ(逃げなさい)……そこに居なさい、…(私が語るまで)」と指示する。

② 続く14―15節一行目では、ヨセフの応答が書かれているが、それは「立って、連れて行った…エジプトへ(去った)……そこに居た、(ヘロデの最期)まで」というように、天使の指示の忠実な繰り返しになっている。このような描写方法をとることによって、神の指示に忠実なヨセフの従順さを強調している。

③ 最後の15節二行目以下では、旧約聖書の言葉を引用し、天使の指示に忠実に従ったヨセフの行動によって、聖書の言葉が成就したことが確認される。

④ 第二段落も第一段落とまったく同じ構成をもっているが、二番目の部分(21―23節二行目)が天使の指示にはない要素を含んでいる。それは「聞いて、…恐れたが、夢でお告げが与えられ、…ナザレという町に住んだ」という部分である。神の指示に忠実なヨセフであっても、「恐れ」が生じることがある。しかし、神は天使のほかに「夢で」語りかけ、ヨセフを勇気づける。このことを教えるために、新しい要素が加えられている。この物語の主人公は、ヨセフというより、彼の背後にあって歴史を導く「主」だと言える。

### ③ 新しい出エジプト(13―15節)

① ヘロデ王は「ユダヤ人の王が生まれた」(2-2)との知らせに不安を抱き、王座を死守するためにイエスを抹殺する計画を立てる。このようなヘロデの頑なさとは対照的なのは、ヨセフの従順な姿である。彼は天使の指示どおり実行し、夢を見たその「夜」、直ちに旅に出る。この旅は夜の逃避行であるから、危険に満ちていた。しかしマタイはその危険だけを述べたのではない。むしろこの出来事は「預言者を通して言われたことが満たされる」ためであり、神の歴史が完成に近づくための出来事である。

② エジプトへ逃げるのが、なぜ歴史の完成につながるのか。それを解く鍵は15節の「エジプトから私の息子を私は呼んだ」というホセア11章1節からの引用にある。ホセアでの「私の息子」はイスラエルを指しており、そのイスラエルの背きが神の嘆きとともに描かれていく。ところがマタイは、この「息子」をイスラエルではなく、イエスを指す言葉として読み替えている。イエスこそは神に背くことのない新しいイスラエルを切り拓いてゆく導き手だからである。

③ ホセア書の聖句がイスラエルの出エジプトを述べていることが示すように、マタイの関心は、ヨセフ一家のエジプトへの避難よりも、エジプトからの脱出にある。ホセア書の聖句によって、マタイはヨセフ一家とイスラエルの民の出エジプトを重ね合わせるが、そのさい、幼子イエスをモーセのような人物として描いている。イエスはヘロデ王の幼児殺害命令を逃れたが、モーセもエジプト王ファラオのヘブライ人幼児殺害命令から逃れている(出1-22以下)。

④ ユダヤ人の間には、申命記18章15節に基づいて「モーセのような預言者がやってくる、それがメシアだ」という考えがあった(使三22、七37)。マタイは、エジプトからイスラエルの地に戻るイエスの姿に「新しいモーセ」を見出している。ヨセフ一家の出エジプトは、預言の成就であると同時に、イエスが来るべきメシアであることを明かす出来事となる。この物語がエジプトに言及するのは、単にヘロデ大王の力が及ばない避難先を告げるためではない。モーセに導かれたイスラエルの民の「出エジプト」を思い起こさせ、イエスによる新しい「出エジプト」に目を開

かせるためである。

#### ④ イスラエルへの入国（19―23 節）

③ ヨセフにイスラエル入国を指示する天使の言葉「立って子どもとその母を連れて行きなさい。…子どもの命を探す者たちは死んでいる」（20 節）は、出エジプト記 4 章 19―20 節を踏まえているが、それはイエスを新しいモーセと見なしているからだろう。モーセがエジプトを出て民を解放したように、イエスもまた人々を導いて解放する者となる。

④ 20 節で天使は「イスラエルの地へ行きなさい」と告げるが、これはただの帰国ではない。「イスラエルへの入国」なのであり、人々を真の約束の地へと導く解放者としての入国である。21 節で、申命記が約束の地への入国を述べるために使う言葉、「入った」を用いたのは偶然ではない（申二七 3 他）。この段落でも「新しい出エジプト」のモチーフは生きている。

⑤ しかしイスラエルでは、ヘロデの息子アルケラオが待ち受けており、再び危険と不安がよぎる。そのような状況でも歴史を導くのは神である。神は夢を通して指示を与える。ヨセフはそれに従順に従い、ガリラヤへと去り、ナザレに居を構える。

⑥ ヘロデ王の死後、王国は 3 人の息子たちに分割された。アルケラオは、弾圧政策によって苛酷な統治をしたので、民衆からローマ皇帝に訴えられ、紀元後 6 年に追放される。これに対して、ヘロデ・アンティパスの統治するガリラヤは平穏を保っていた。ヨセフがアルケラオの統治するユダヤを避けてガリラヤへ向かったという記述は、こうした歴史的事実と符号する。

⑦ ナザレはガリラヤ湖の南端から西方 20 キロ余りの所にある無名の町であり、旧約聖書にも当時のユダヤ教文献にも一度も言及されていない。イエスは「ナザレ人」と呼ばれるようになるが、この呼び名の由来については主に三つの説がある。⑧ 単に「ナザレ出身の人」を指すという説。⑨ ヘブライ語の「ナジル」と関係するという説。ナジルとは、サムソンやサムエルのように、誓願によって神に献げられた聖なる者を指す。この説によれば、イエスは、母の胎にいる時から、神に仕えるために、分かれたれ選ばれた聖なる「ナジル人」と呼ばれたことになる。⑩ ヘブライ語の「ネーツェル（若枝）」と結びつける説。この節が、ゼカリヤ 6 章 12 節「見よ、これが『若枝』という名の人である」を踏まえているとすると、「彼は『若枝（ネーツェル）』と呼ばれるであろう」という意味になる。名もない町（ナザレ）に聖別された若枝（ネーツェル）が生じ、メシアとしての働きがいよいよ開始される。

#### ⑤ 神が導く出来事にあずかる

① 福音書記者マタイは、イエスが誰であるかを示すために、抽象的な概念による説明という方法を取らずに、誰もが分かる物語という形を用いている。困難と不安に満ちた状況にも関わらず、神の御手は幼子の上であり、イエスを通して神の計画が成就していく。ヨセフもその従順によって、神が導く喜ばしい出来事に参与することになる。その出来事とは新しい出エジプト＝約束の地への新しい旅立ちであり、この喜びが物語に響いている。

② ホセア 11 章 1 節の「エジプトから私の息子を私は呼んだ」は、メシアに出会ったマタイにとつて、もはや書かれた文字ではなく、神の生きた語りかけとなる。イエスによって伝承の意味が明らかになり、伝承によってイエスの意味がますます深く理解される。この聖句を思い起こす者は、イエスに出会うとき、イエスこそ新しい出エジプトを導くメシアであることを知る。